一橋論叢　第二十八巻　第六號

獨乙教養小説について

——その教養理想と社會背景——

登張正實

本稿は大畑末吉先生との科學研究費による共同研究「獨乙教養小説における市民社會の展開」にたいするわれわれの志向するところをあきらかにしようとするものである。

文學作品が何らかの意味で作者の時代と社會に對する批判をふくみ、作者がどのように彼の時代と社會を生きぬいているかという姿を示すものとすれば、いかなる文學作品も程度の差こそあれ、種類や樣式の相違を問うことなく、その屬する社會の反映でないものはない。

しかるにわれわれがいま獨乙教養小説という特定のジャンルをえらんでそこにあらわれた背景社會の展開をさぐろうとするには、またしかるべき根據がなければならない。その根據をあたえるものは一は教養小説そのものの有する特質であり、他はかゝる研究を强いるわれわれの心にひそむ內在的動機である。

もし、過去の遺產の流れをどのように正しくうけついで、これをどのように正しく未來に向つておし流すかということが、現在という時間の上に立つ人間の價値多き使命の一つであるという立言が許されるなら、その使命にもとづ

く理想にむかつての人間形成をあつかつたものがドイツ教養小説であり、教養小説の系列に屬する個々の作品における教養理想と社會背景の關係を考察しながら、さらにこの系列を縱につらぬいて教養小説自體の展開を見るときに、近代人と近代社會の必然的な發展の歩みを見きわめ得ることによつて、われわれ自身の存在の軌道を抽出して、現在における文學的假設を措定しうる可能性を期待するのである。

こゝにわれわれの研究の意圖と自己目的とが存する。

それなら教養小説とは一たいいかなるものであろうか。

一　概　念

教養小説（Bildungsroman）とはふつう、ある人間が一定の生の形成に達するまでのその魂の發展過程を表現する、といわれていで、ドイツ文學における他に比類のない特色とされているが、この場合の Bildung は內面に重きをおいた人間の全的形成の意味であつて、教養という日本語では十分に言いあらわせない深いひゞきを有する。從つて教養小説においては作者の念頭に形成目標あるいは教養理想がおかれているが、教育小説（Erziehungsroman）、たとえばペスタロッチの「リエンハルトとゲルトルート」のように、特定の目標にたいしてある人間を教師のような特定の人々が直接に指導するという形體とは異なる。

また發展小説（Entwicklungsroman）と呼ばれるものは、文字通り發展という概念を主としていて、自然にある段階に到達する必然の結果はあつても、形成の目標は缺いてもさしつかえない。ゆえにすべての教養小説は同時に發

展小說となり得るが、發展小說がすべて教養小說とはかぎらないという微妙なニュアンスによつて兩者をするどく區別する人もいて、グリムメルスハウゼンの「ジンプリチシムス」ははたして教養小說か發展小說かという論議もなされているのであるが、そも〳〵ビルドゥングということが外部の世界と對決する自我すなわち個人が自己の特殊性を生かしつゝいかにして理想的人間像に發展するかという核心にこそ目標があり理想を見いだすわけであるから、教養小說と發展小說とはほとんど同樣にかんがえてよいであろう。(1)

ゲーテの「ヴィルヘルム・マイステル修業時代」の主人公ヴィルヘルムは語つている。

「わたくし自身をあるがまゝにつくりあげて行くこと、それがおぼろげながらも小さいときからわたくしの願いでありもくろみでした。」(五の3、ヴェルネルへの手紙)(2)

このような人間形成の概念にはさらにギリシャのパイディアの理念が傳わりこもつているとするのはギリシャ學者イェーゲルである。ギリシャの最高の遺產である人間性の理念は偶然に咲いたものではなく、やはり歷史の必然のあゆみを經てかちえられたものであつた。古い信仰への隷從から解放されて個性に目ざめた人間は、さらにすゝんで、すべての個人をその特性のまゝに包攝する人間の美的理想像をつくり、自己の主體を客觀化して、あらゆる人を社會的實踐としてその像の中へ陶冶していくことをかんがえた。何故ならどんな個人にもその理想に達すべき根本形體が內在すると認識したからであり、プラトンのイデア、アリストテレスのエンテレヒーはそのあらわれである。パイディアとはそうした精神と肉體の兩面からする人間形成のことであり、Bildung とはすなわちこの意味であるとするイェーゲルの言葉をわたくしはそのまゝうけいれる。(3)

この人間形成の理念はドイツ文學においてはそのいちじるしい特徴である內面性とむすびついて內面形成が主要な問題となつたが、教養小說がそうした類型と同時に、時代と社會の進展にともなつて多くの相違も生ずるのは當然である。

註1 Käthe Heesch はその著、G. Kellers „Grüner Heinrich" als Bildungsroman des deutschen Realismus. 1939 において教養小說、發展小說とならべて、世界と自我とを對立させて、發展小說をふくめて自我を中心とする教養小說にたいして世界に生起する事件を中心とする Ereignisroman の概念を措定してこれに妥當する作品としてゲーテの「Werther」をあげている。

註2 ヴィルヘルムは市民社會の中に自己を形成する歸結を見いだし、おのれにふさわしい職業として一介の外科醫になろうとするが、一定の生の形成が必然的に生んだ職業であつてこの職業そのものが教養理想ではない。

註3 Werner Jäger には Paideia. Die Formung des griechischen Menschen の主著があるが、わたくしが參照したのは Humanistische Reden und Vorträge 1937 の中の Antike und Humanismus および Die geistige Gegenwart der Antike である。

二 展望

教養小說の形體がドイツ人にきわめて愛好されるために各時代にわたり數多くの作品がこの系列に屬しているが、典型的な作品をあげるならば、時代的に見てドイツ最初の教養小說は中世のヴォルフラム フォン エッシェンバハの「パルチファル」と見なされる。(1) 更に、

グリムメルスハウゼン「ジンプリチシムス」1669
ヴィーラント「アーガトン」1766
ゲーテ「ヴィルヘルム・マイステル修業時代」1796
ヘルデルリーン「ヒュペリーオン」1799
ノヴァーリス「ハインリヒ・フォン・オフテルディンゲン」1799
ケラー「緑のハインリヒ」1854
シュティフター「晩夏」1857
ヘルマン　ヘッセ「デミアン」1919
トーマス　マン「魔の山」1924
ヘルマン　ヘッセ「ガラス玉遊戯」1943

等をあげ得るが、これらはいずれも前述の教養小説の概念に妥當するものとして一般にみとめられているものであり、この外にも論者によりまた必要におうじて取上げらるべき多くの作品がある。(2)

これらを「パルチファル」よりはじめて思潮史的に追うのが順當な研究であろうが、われわれが當面する課題、すなわち人間形成を軸として教養理想と社會背景との關係、とくに市民社會にたいして詩人が主人公をしてどのような形成の道をあゆませているかという問題からわれわれは次に說くような區分をかんがえてみたのである。

なおドイツ以外の國において教養小說とよばれるにふさわしい作品があれば比較文學的考察によつて教養小說の本

質を一そうあきらかになしうるわけであるが、そういう作品としては、

ディケンズ「デイヴィッド・コパーフィールド」1850

ロマン　ロラン「ジャン・クリストフ」1912

の二つがふつうあげられるにとゞまる。このうち後者は第一次大戰前後のトーマス　マンやヘッセの作品とならんでフランス人の手によつて獨佛思想の綜合をめざす典型的な教養小説として注目すべき重要な意義をもつている。これに比すると前者は教養小説の觀點から見て多くの疑義を有する。(3)

ドイツ文學においてゲーテの「ヴィルヘルム・マイステル」がロマーンの名稱にふさわしいほとんど最初の作品であり、これが同時に教養小説であつたことがドイツ文學の性格にまことに決定的な影響をあたえた。ロマーンではないが、人間形成をあつかつたもつとも偉大な作品として「ファウスト」があり、ゲーテ以後教養小説的なものが魔力をともなつて展開するとともに、ゲーテ以前にもとめれば前述のごとく中世までさかのぼる。またドイツにおける近代という問題もゲーテ、シラーを中心とするドイツ古典期が一つの分岐點であり、端的に思潮的に考察してもギリシャにはじまる人間性の理念とキリスト教の思想がルネッサンスと宗教改革を經て一つの上昇の線をたどりつゝ古典期にいたつてあの獨自の內面的理念的なドイツ理想主義をかたちづくるのであり、それはまたドイツの政治經濟上の複雜な社會地盤と符合するものであるがゆえに、教養小説においても「ヴィルヘルム・マイステル」が分岐點であるとともに一つの頂點である。

從つて教養小説の系譜をまずゲーテ以前と以後にわけることが適當である。

ゲーテ以後についてはメリッタ　ゲルハルト[4]のごとく純粹な意味での教養小說は「ヴィルヘルム・マイステル」でうちきつてしまうのもいるが、これはつまりゲーテ以後の作品はすべてゲーテのエピゴーネンにすぎないように思われるからであろう。たしかにそういう觀點は一面の眞實性があり、ことにゲーテが偉大な存在であればあるだけその妥當性が濃厚である。

しかしゲーテ時代以後は市民社會の成熟期ではあるが、ちようど明治維新以後の日本の社會のように、中世的封建的遺制の上に資本主義が展開してきわめていり組んだ絲のもつれのごとき樣相を呈するのであるから、詩人の現實と自我に對する問題も深化し複雜化して一樣に論ぜられないが、浪曼派は先にあげたノヴァーリスの作品の外にもティークの「シュテルンバルト」、Fシュレーゲルの「ルチンデ」等の教養小說とみなさるべきものがあつても、いずれも現實から遊離して世界と分裂し對決する自我という問題の所在がうすれるためにわれわれの考察の對象となりにくく、ヴィルヘルムのエピゴーネンに見えながら、ヴィルヘルムが市民社會の生の中へ調和的に肯定的に發展して行くのと對照して、現實と對決して自己否定を經てより高い現實を捕捉しようとする自我の動きにおいて近代を一歩進めたものとしてケラーの「綠のハインリヒ」を重視せねばならない。

二十世紀にはいつては第一次大戰前後にすぐれた教養小說があらわれていることに注目しよう。第一次大戰はひとりドイツとかフランスといつた一國のみならずヨーロッパ全體にわたつて生存を危殆におとしいれた。ロマン　ロランが早くからその危機を見ぬいて「ジャン・クリストフ」を通じて發した警世のことばもむなしく、ヨーロッパはついにその危機を爆發させ、ロマン　ロランに應ずるごとくトーマス　マンやヘッセの諸作品があらわれたのであつた。

これらは皆個人の形成を主題としながら、政治、經濟、文化、あらゆる人生の問題を對象にとりあげていて、これまでの教養小説の概念では律しきれないように見えるが、わたくしはこゝにこそ教養小説の近代的擴充を見るのである。そしてそれは今次の大戰を經て現在までもちこされる。

このように見てくるときに教養小説の系列はおのずから次の三段階に區分される。

一　パルチファルよりヴィルヘルム・マイステルまで。

二　綠のハインリヒを中心とする十九世紀。

三　第一次大戰を契機とする諸作品より現在に至る。

しかるに教養理想と背景社會との關係をさらにおしすゝめて、

A　詩人が自己の屬する社會の限界內での形成を意圖しているか

B　自己の屬する社會を超えて未來に教養理想をおいての形成を計量するか

の二點からながめて、いま前述の第一段階の作品を分ければ、

A　パルチファル、アーガトン

B　ジンプリチシムス、ヴィルヘルム・マイステル

となる。すなわち、「パルチファル」はギリシャの人間性の理念がキリスト教と出あい、次第に融合して、神への信仰のもと、人間性の基盤の上に理想的人間像として理想的騎士像が樹立されていた時代の生んだ作品であり、「パルチファル」の教養理想ははじめから客觀的に確立していて、主人公はこの客觀目標にむかつて內面的に成熟して行け

ばよい。

「アーガトン」においては心理的な發展過程において近代的な自我の問題があるが、啓蒙思潮を一歩も出ていない。これに反し「ジンプリチシムス」はドイツにいちじるしい後進性をもたらす結果となつた三十年戰爭が生んだドイツバロックの文學であるが、あらゆる混亂、惡德、荒廢の中に浮き沈みしながら、眼を高く前方に据えて未來を建設しようとする形成のあゆみはむしろ「アーガトン」をこえてゲーテと直結し、ドイツ古典期の理想主義的內面理念をつくり出し、人間形成の典型を生ずるに至つた準備期としてわたくしはこの「ジンプリチシムス」を特に重視している。

「ヴィルヘルム・マイステル」は勃興する市民階級の中に教養理想を見出していると言えよう。

同じように「綠のハインリヒ」やシュティフターの「晩夏」は市民社會の中での近代性を推進する自我の追及であり（Aに屬する）、「ジャン・クリストフ」以降は戰爭を契機とする大規模な背景の中から市民社會をこえて新たな人間の形成を洞察しようとする道においてちようど「ジンプリチシムス」から始まる過程と照應するように見え（B）、「ヴィルヘルム・マイステル」に等しい意義をもつた作品はまだ出ていないとするのがわたくしの考えである。

こゝに前の三段階と配合して次の圖式が生れる。

（一）（パルチファル）――ジンプリチシムス――アーガトン――ヴィルヘルム・マイステル

市民社會の成立過程にともなう理想主義的內面理念の確立にいたる人間形成の展開を示す。

（二）綠のハインリヒ――ジャン・クリストフ、魔の山、デミアン――ガラス玉遊戯

市民社會の成熟とその複雜な樣相の展開にともなう前者の繼受、擴充の過程を示す。

この(一)と(二)に充分な考察がほどこされたならば、第二次大戰後の現在、教養小説がいかなる意味と價値をもつか、またはたして新たな擴充がなされ得てゲーテ時代に照應する時期を迎えるかどうかという問題がわれわれを待ちうけている。

かくしてわれわれの研究は一人や二人の力ではどうにもならない大きな擴がりをもつているのであるが、われわれは出來るだけの研究の歩を進めたい。

註1　近代という觀點から「パルチファル」を考慮にいれない説もあるが、ギリシャ精神とキリスト教という西洋精神の二大潮流の關係から「パルチファル」を鼻祖と考えるのが至當である。

　相良守峯「獨乙中世敍事詩研究」參照。

註2　ゲーテの測り知ることの出來ない影響から彼以後の文學作品には何らかの意味で教養小説的傾向をおびているものが多く、十九世紀においてはイマーマン、メーリケ、フライタークの作品、二十世紀に入つてトーマス　マン、ヴァッサーマン、ヘッセ、カロッサの諸作品は教養小説の考究の對象となるものが多い。

註3　本學の海老池俊治氏、青木雄三氏にうかがつた所では「デイヴィッド・コパーフィールド」は教養小説として考えるべきでなく、英文學にもとめればむしろカーライルの「サーター・リサータス」、ペーターの「享樂主義者マリウス」などではないかという意見であつたが、時機を得て考究したい問題である。

　フランスの國粹的文學者ルイ　レイノウは「近代フランスにおよぼしたドイツの影響」(佐藤輝夫譯)で次のように言つている。「教養小説ジャン・クリストフの中で技巧方法、思想、文體など一切がゲルマン的である。そしてこの作者は、よし非難

する場合でも、ともかく彼がドイツというものを語るときに限つて、その理解と同感のゆえに、彼は眞に樂な、自分のうちにいるような感じを人に與え、これに反しフランスのことを語るときは、なんだか外國人だといつた感じを與える。」(三六八頁)しかしこの作品はドイツの眼から見ればフランスの傳統に深く根ざしたものを多分に含有している。

日本においてこの種の小說に該當するものを強いてもとめれば、宮本百合子「道標」があるが內面形成の契機の點で薄弱であり、むしろ河上肇「自叙傳」をきわめてすぐれた教養小說的文學作品と見なすことが妥當のように思われる。わが國の進步的陣營におけるこの傾向は注目に價する。

註4　Melitta Gerhard: Der Deutsche Entwicklungsroman bis zu Goethes „Wilhelm Meister." 1926.

三　形成——外界と內面——

「ゲッツ」や「ヴェルテル」を通じて社會や個人道德の矛盾に體あたりにぶつかつてくずれ去る姿を描いて時代の先驅に立つたゲーテはギリシャの美的理念による自己規制をおこないつゝ理想的人間像への形成の道を「ファウスト」や「ヴィルヘルム・マイスステル」によつて示した。商人の世界、演劇社會、貴族社會などを經めぐるうちに、人間の限界と方向とを次第に探知しながら、つゝましやかに一市民として社會に奉仕するに至るヴィルヘルムとともに歩むとき、そこに見出されるものは一體何であろう。テレーゼはナターリエにあてゝヴィルヘルムを次のように言つている。

「あのかたの生活記錄は永遠に探し求めて、しかも何も見いだすことがないのです。ですが、うつろな探求ではなくて、善意のこもつた驚くほどの探り方なので、何かをあのかたは授かるのです。自分から生まれてくるものだけ

が身にあたえられるものだとあのかたは思つていらつしやるのです……」（八の4）

彼は子を得、愛を得、「塔の結社」を知つた。しかしそれがすなわち歸結ではない。強いて言えば人生そのものを見いだすのである。それも單に人生を知つたというようなものではなく、はげしい苦惱も眼のくらむようなよろこびも缺けてはいない豐かな生の斷面をひらいて彼の心情をはぐくむ一切の外界、殊にそれ〴〵の社會に屬する典型としてあるいは貴族的あるいは庶民的性格をおびて人間のさま〴〵なメタモルフォーゼを示しつゝヴィルヘルム同樣の主人公的價値を有して客觀的にあざやかに描かれている周圍の人物、それらが皆ヴィルヘルムの發展過程に吸收され解消され、ヴィルヘルムは綜合的に上昇してある人間像に形成されて行く。外的現實に對する內的現實であり、シラーがいみじくも指摘した理念の形姿である。この理念をかち得た個人はふたたび外界に立ちむかい、「遍歷時代」や「ファウスト」第二部に示されるごとく、現實世界を新たに導き樹立するほどの存在になる。古典主議的ヒューマニズムと呼ばれる理想主義的形體はもとよりゲーテ一人に對する名辭ではないが、このような內面形成の苦鬪の所產なのである。

この形成過程、もしくはカント――シラー――ゲーテとつながる內面理念を生んだ原因については、ルネッサンス以來順調に社會の近代化をおしすゝめて行つたフランス、イギリス、イタリー等の先進國に對して後進國の名に甘んぜねばならなくなつたドイツ社會の貧困にあることがすでに定說である。[1] 先進國の思想が進入して渦まく中に、ドイツは何百という封建領主のもとにうごきもすごきもならない卑小な社會地盤にあえいでいた。すぐれた詩人、哲人がこの現實を引上げて彼らの意識する個人の生存の場と調和しようと努力して、ついに個人の內面においてこれを超克

して、更に現實に對處する道を創造したのであつたが、個人、社會いずれの側より見てもこれは一つの悲劇である。シラーの悲劇もこのような意味において理解されねばならない。

この理念の樹立される過程に古代性の攝取という契機があるが、フランスにあつてはギリシャの政治性を攝取したのに對し、ドイツでは美學的立場からその美的理想像を繼承して、大理石のごとく冷ややかな靜かな一つの規範をつくりあげたという相違も見のがすことは出來ない。[2] ドイツでギリシャの政治性に眼をむけたのは「ヒュペリーオン」の詩人ヘルデルリーンであるが、その瞳をドイツにそゝいで絶望し、ディオティーマに理想美を見いだして、自由への限りない憧憬と、完成にむかう自己規制との綜合をエロスにもとめながら、それもはかなく消えて疲れた彼は自然の中に、神祕の永遠の生命のうちに歸入する。純乎として純なる魂がドイツの「秩序のない混亂の不協和音に耐え得ない」苦悶は悲痛である。ゲーテ、シラーが美的古代をとり入れたのも止むを得ざる必然性であつた。

ルカーチはゲーテとシラーの美學的思索の段階で提起された問題は二元性をふくんでいることを指摘している。[3] 一方では古代の研究から、藝術家がそれによつて近代生活に特有な性格を表現し得るような藝術法則の體系をみちびき出そうとする。「ヴィルヘルム・マイステル」はその證明である。他方では古代の研究から、現代においてもそれによつて一個の古典的藝術が創造されうるような一般的で永遠の法則の體系を生み出そうとする。「ヘルマンとドロテア」がこれを證明しているが、ゲーテやシラーはどちらかと云えば後者の傾向が強い。

古代の研究はゲーテ以前にヴィンケルマンの偉大な研究があり、レッシング、ヴィーラント、ヘルデル等あまたの先輩があり、ヴィーラントの「アーガトン」がギリシャ的地盤に立つ教養過程を描いているのはまことにうなづける

ものがあり、ゲーテに至る過渡期と見なされる。

古代の發見はもとよりルネッサンスのもたらしたものであるが、ルネッサンスの精神、すなわち人間性の理念の側に立つて古代とキリスト教との綜合をはかつたのがドイツ古典主義であり、その根抵に貧困な混迷せる社會のおくれが横たわつているとすれば、その直接の原因が宗教改革とそれに端を發する三十年戰爭、さらにそれにつゞく荒廢と災厄の社會狀態にあることはいうまでもない。

この事態の生起した十七世紀は思想的に不毛の時期としてほとんど顧みられない。(4) しかし現象的にではなく內面形成という點から見るときわたくしはバロックと稱されるこの時代に注視する。このバロック時代を古代とキリスト教の對立が綜合に至らなかつた擬似(ブンイド)ルネッサンスと考える學說(5)もあるように、宗教改革が內面的傾向を深化し、その後をうけたドイツバロックはまず神と世界をいかに把握するかという問題に直面し、ベーメ、グリューフィウス、グリムメルスハウゼン等のすぐれた詩人、哲人たちは苦難の世界にあつて神という問題と體あたりにぶつかる宗教體驗をよぎなくされたのである。宗教性の天蓋のもとにおける對神對人間の二元性の問題であつた。英佛等の先進國のバロックにおいては、すでにキリスト教と古代、すなわち教會的スコラ哲學と世俗的學術的思惟の抗爭の形であり、啓蒙思潮にあつては後者の完全な勝利を意味した。このような抗爭はドイツでは十八世紀啓蒙期に入つて始めてあらわれ、奇妙に錯雜した經路をたどつて、その正しい發展と綜合とをゲーテ時代に期待せねばならなかつたずれと變貌と一種の發展とがある。

こうしてわたくしはバロック時代に古典時代の準備期を、その要因を見る。特にグリムメルスハウゼンの教養小說

「ジンプリチシムス」はその內面形式において、大衆の味方として統一あるキリスト教社會を建設しようとする未來に燃える理想において、また客觀的リアリズムの描寫によつて現實を批判してこれをどこにみちびくかというロマーンの手法上の本質においてあきらかに「ヴィルヘルム・マイステル」に通うものがあり、バロックに住してバロックを超えようとしたこの作品は傑作の名にふさわしく、この時代にかゝる精神を把持した作者の眼に尊敬をはらうに吝かでない。

ゲーテは長いこと「ジンプリチシムス」を知らず、一八〇九年六十歳の年にはじめてこの作品に接したと傳えている。從つて少なくとも「修業時代」には直接の關係はないわけであるが、內面的聯關性の上から教養小說の系列においてもドイツバロックのこの作品をわたくしは高く評價している。グリムメルスハウゼンを中心とするバロック文學については一度小論したことがあるので詳細は省略したい。(6)

ドイツ文學が、端的にドイツ教養小說の流が、悲慘な社會とそれに對する人間の長いはげしい內面のたゝかいのあたかも辨證法的な經過ののちにあの古典期の偉大さに到達したということに瞠目するのである。

現代のわれわれにとつてはゲーテ以後の教養小說の姿こそ問題なのであるが、今後の研究に俟たねばならぬ多くを殘していることを告白しつゝも、われわれが先にあげた圖式に關連しておぼろげに豫感するものについて一言するならば、ゲーテ時代において現實をひきずるほどに强力であり得た理想主義的理念は、一九四八年の民主革命の失敗後、單なる觀念に退行する。中世的貧困を基盤とする資本主義的帝國主義的展開の方向が形成目標を失わしめたかと見紛うほど見るべきこの種の文學作品に乏しいのはどうしたわけであろう。この中で市民的熱情と民主主義的洞察に富む

「緑のハインリヒ」の作品ケラーのごときすぐれた作家がいるが、結局彼は故郷のスイスに戻つて自己の文學を開花させねばならなかつた。あるいは又、詩を犧牲にしても社會改革の必然性を感じたハイネ、ベルネ、グッコウ等の詩人はいずれもフランスに亡命を命ぜられた事態は矛盾に富んだ壓倒的な現實の力が人間形成の道を抑制してしまつた證左ではなかろうか。そればかりではない、ドイツの政治力はかつての理想主義的理念を歪曲して自己の政治性に奉仕せしめるほどに强大になつたことが認められる。同時にそこには人間と精神の危機が增大しつゝあつた。

一九〇四年のヘッセの「ペーター　カーメンチント」は一種の發展小説であるが、市民社會を逃れて自然に救を見出す姿は現實に對するあまりにも微弱な抵抗にすぎない。むしろ隣國のフランスに民族的エゴイズムを脱却してフランス精神とドイツ精神の綜合的形成によつてヨーロッパ文化を構成し直そうとするロマン　ロランの作品はゲーテの蒔いた種の新たな成長であつたが、ヨーロッパはついに大戦の破局に突入した。

大戦と祖國の衰頽の中から、ちようど「ジンプリチシムス」のように、人間の新たな可能性を內面形成の歸結に見いだそうとするはげしい努力がくりかえされた。無論時代のへだたりから來るその樣相の相違にもかゝわらず、「魔の山」や「デミアン」において戦爭の體驗から現實を克服すべき人間性の再生を探ろうとする物ぐるおしいほどの努力において「ジンプリチシムス」と相通ずるものがあつた。

「魔の山」は死に面しているヨーロッパを暗示しているであろう。この書ではヨーロッパにそれまで流れた大きな思想がそれぞれ一人の人物に具象化されている。民主主義者、ヒューマニストのゼテンブリーニ、カトリック神祕主義者の狂信者ナフタ、ニイチェ的生の領域を代表するペーパーコルン、愛と死の戯れを思わすマダム　ショーシャ、

主人公ハンス　カストルプが「魔の山」のるつぼの中で精練されて、新らしい未來を荷つて形成のはてに生み出そうとしているものは、ふたたび理念的なものである。それはファウストの「永遠の女性的なもの」を連想せしめる「人類を支える愛の精神」であり、ヘッセが「デミアン」によつてあらたに探り出した出發點も亦「萬物の母」なる「大いなる愛」であつた。詩人の道はもう一度エロスとロゴスの根源に立ちかえつて出發しようとする。これはまことに正しい崇高な努力であつた。

にもかゝわらずその後のドイツ現實のあゆみはます〳〵その複雜さと奇怪さを增してふくれあがるばかりである。この巨大な力に對抗してなお且つ生への肯定的な形成の道を斷絕しないためには、神話の世界にさかのぼつてそこに展開する事象に卽して神話と人間性の融合をこゝろみ、あらゆる對立を止揚して新たな人間の秩序を探ろうとするか（トーマス　マン「ヨーゼフとその兄弟」）、ゲーテの「教育州」の理念を擴充してきわめて廣汎な個性的精神世界を確立して外界と隔絕した孤高の姿を保つ（ヘッセ「ガラス玉遊戲」）等の道がえらばれねばならなかつた。

元來「ヴィルヘルム・マイステル」や「ファウスト」の形成過程はもつと現實に密着したものである。ヴィルヘルムは新たな文化の擔い手たるべき勃興しつゝある市民階級の意識による認識と洞察を得たのであつたが、今世紀の偉大な作家の樹立したものは、そこに至る過程がどれほど苛烈な崇高さをおびていようとも、現實を照射する力がどれほど輝かしいものであろうとも、觀念的な、あまりにも觀念的な世界である。しかしこうした理念の擴充を惹起した必然性は同時に宿命ともいうべきドイツ社會と詩人の精神とのあいだに橫たわる悲劇性の擴充でもあつた。

第二次大戰後のドイツは比類のないきびしい條件のもとにおかれているが、わたくしはこれが前述のようにいずれ

の日か第二のゲーテ時代を迎えるべき悲痛な過渡期であることを祈りつゝも、この後もはたして教養小説が文學の形態として殘りうるのであろうか、それとも理念的な形成方向に文學の側からか、社會の側からか悲劇性を超克すべき大きな轉換がおこなわれるであろうか、と考えまどわざるを得ない。しかしいまは性急な獨斷的判斷をおかす危險をさけねばならない。

ゆえにわれわれが現代に對する明確な文學的歸結を得んがためにも、しばらくゲーテ周邊に立戻つて、教養小説におけるドイツ的形姿の流れを見きわめようとするのである。

註1　貧困は俗物性を生む。ゲオルク　ブランデスやF　シテーなどによつて指摘されて、この俗物性は論者の常に攻擊するところであり、ゲーテといえどもこれを免れることはできない。

註2　イェーゲルによれば、ゲーテのギリシャ觀は彼獨自の美的な映像であり、實際のギリシャはもつと動的な色彩ゆたかなものである。

註3　ルカーチ「獨乙文學小史」(道家・小場瀨譯)、四三頁。

註4　R. Benz: Deutsches Barock. S. 11 ff. 1949 この書は十八世紀をふくめてバロックと總稱し、十七世紀は極とんど無意味なものに考えている。

註5　H. Cysarz: Vom Geist des deutschen Literatur-Barocks, Vierteljahrsschrift, Heft 2, 1923.

註6　拙論「實在と假象」廣島大學文學部紀要　一九五一

註にあげた以外の參考文獻

E. Alker: Geschichte der deutschen Literatur von Goethes Tod bis zur Gegenwart. 1950.

B. Blume: Thomas Mann und Goethe. 1948.

G. Brandes: Hauptströmungen der Literatur des 19. Jahrhunderts. 1924.
H. Cysarz: Von Schiller zu Nietzsche. 1928.
E. Ermatinger, W. Flemming, F. Koch: Deutsche Kultur des Barocks, der Aufklärung, des Idealismus; Handbuch der Kulturgeschichte. 1935—39.
E. Franz: Deutsche Klassik und Reformation. 1937.
F. Martini: Deutsche Literaturgeschichte. 1951.
F. Strich: Dichtung und Zivilisation. 1928.
上原專祿　學問への現代的斷想　一九五〇
吹田順助　近代獨乙思潮史　一九三八
增田四郎　獨乙中世史の研究　一九四三
道家忠道　ゲーテの「ファウスト」における歴史性と近代性　東大教養學部編「外國文學紀要」一九五二
丸山武夫　ドイツ浪漫派の自然感情
トーマス　マン　作家としてのゲーテの道程
阿部六郎譯　市民時代の代表者としてのゲーテ　一九三五